とよかわのみーつけた！

とよかわのこころ 古建築が残る三明寺三重塔と旧本堂

三明寺は、本堂内の宮殿に弁財天が祭られているため、昔から弁天様の名で親しまれています。大宝年中（701～704年）に文武天皇の詔を受けて建立され、12世紀後半に兵火によって一時荒廃しましたが、室町時代に後醍醐天皇の子の無文元選が再興したといわれています。市内で数少ない古建築が残る寺院で、鳥居をくぐって左側に建つ三重塔が国指定、池の向こう側に建つ旧本堂（指定名称は本堂）が県指定の文化財であり、今でも古来の建築技術を垣間見ることができます。

三重塔は、享禄４（1531）年に建立された高さ14.5㍍の小塔で、１・２層を和様（日本の様式）、３層を唐様（中国の様式）に造り分けているのが特徴です。よく見ると、下の１・２層に比べて、３層の屋根の反りが大きいのが分かります。また、旧本堂は、牛久保の大工・岡田善三郎成房により正徳２（1712）年に建立されたもので、柱の上に太いはりなどを多く使うことにより、広い空間をつくりだしているのが特徴です。

身近なところで、古来の建築技術の巧みさを感じてみてはいかがでしょうか。